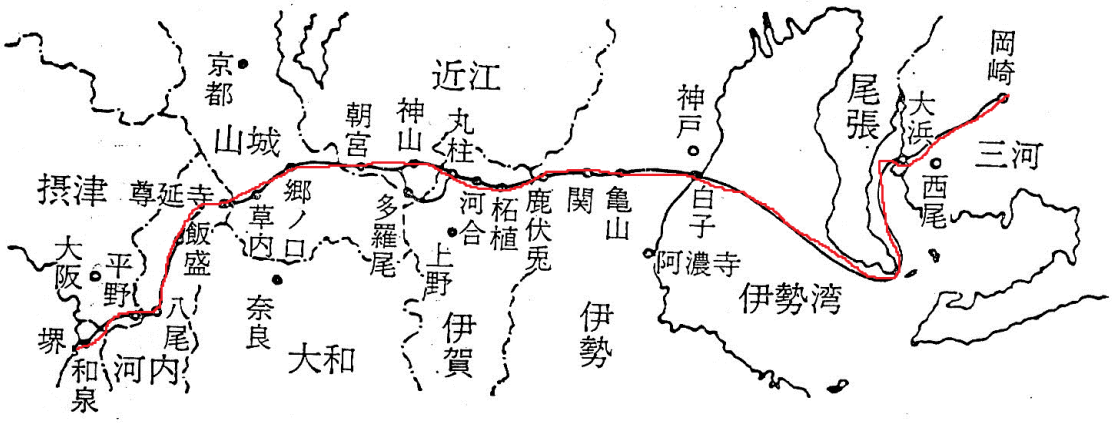
こだわりのひとり旅　（武将シリーズ　その７）

「　家康の伊賀越え　」

2015-7/25～29　　遠藤俊一

天正１０年（１５８２）６月２日、本能寺の変である。
一代の英雄、織田信長は部下の明智光秀の謀反により本能寺に倒れる。
信長存命なれば後の世をもっと斬新に変えていただろう。
歴史が大きく変っていただろうといわれる。
私の「こだわりの旅・武将シリーズ」第１作、第５作に登場した、あの秀吉も元親もまた違った道を辿ったことだろう。

このとき徳川家康は泉州・堺(今の大阪)にいた。
３月に武田氏を滅ぼした織田信長の招きによりお祝いに安土城に行った。
５月１５日のことであった。献上品は鎧３百疋と金３千両だった。
信長は大いに喜び歓待し、さらに京・奈良・堺の遊覧を進めた。
その在京中の所要に充てるようにと３千両のうちから１千両を返した。
これが後に家康の命を助けるものとなるとはお互いに知らなかった。
家康は信長が差し向けた案内人長谷川秀一、そして自分の家人達と京都の名所旧跡を７日ほど遊覧し、５月２８日に大阪に下り、２９日堺に行った。そしてこの日、信長は本能寺に入っている。家康は宿舎を妙国寺にとり堺商人との交流や見物にすごした。
６月２日、京都にいる信長に挨拶をしてから領国の浜松に帰ろうと堺を発った。
先遣隊として本多忠勝を未明に出発させた。正にこのとき本能寺の変が起きていた。



伊賀越え経路図

京都で本能寺の変をしったのは家康と親しい商人の茶屋四郎次郎であった。
彼は家康に知らせるべく馬を走らせ、途中で先遣隊の本多忠勝と出会う。
驚いた忠勝はすぐさま引き返し飯盛山下で家康一行と出会う。
このまま京に向かえば明智光秀に見つかり確実に命を落とす。逃げなければならない。
どの道を通ればよいのか、どの道をいっても土一揆、落ち武者狩り、明智の追っ手の危険が待っている。必死に考えたことであろう。
家康一行が選んだ道は「伊賀越え」であった。
後の江戸幕府が「神君・家康の伊賀越え」と呼ぶ家康の人生最大の危機であった。

今年のこだわりの旅のテーマを「家康の伊賀越え」に決めた。
２年前の四国「長宗我部元親」の時、先に準備を進めたが時間切れで一時中断をしたテーマだ。昨年は「楠木正成」を取り上げている。今年こそ「徳川家康」をやろうと決めた。
あの時、伊賀越えのルートは調べた。あとは、当時の地名と現在の地名との突合せ、そこへの交通手段の段取り調査、宿泊地の決定と手配をすればよい。
参考本は主に鳥影社刊、「東海大名家康」川崎文隆著を選んでいる。各地の案内本は各都道府県の「歴史散策」を例年参考にしている。

最初、交通手段を路線バスの乗り継ぎでやりたかった。最近のテレビ番組の影響で一度あれをやってみたいと思っていた。私のこだわりの旅を路線バスの乗り継ぎでやってみようと準備を進めた。
しかしこれが大層難しいことに気がついた。テレビでの路線バスの乗り継ぎは目的地へ到着すればよいとか、あるいは何箇所かの経由地を経て目的地に行くことだ。つまり、点を追ってゆくことだ。ところが私の今回のこだわりの旅は家康の辿った道だ。つまり線が決まっている。それに合わせた路線バスなどない。あってもほんの一部だけだ。路線バスはその土地の主要駅から放射線状に伸びている。あまり県境は越さない。越すのは主要都市を結ぶものだけだ。今度の旅は大阪、京都、滋賀、三重、愛知と５県の横断だ。バス路線をずいぶん調べたが結局断念した

そうしたら不意にひらめいた。そうだ、オリエンテーリングをやろう。
私の会社の新入社員教育で毎年やっているものだ。地図と磁石とコンパスを使って指定された場所のポストを探して、そのポストに書かれている記号を見つける競技だ。徒歩でやっている。
それのスケールをものすごく大きくしてフィールドは５県に渡り、列車、バス、レンタカー、何を使ってもよい。そして歩きだ。ポストは家康の辿った地名の出ている「バス停」「道路標識」「駅名」にしよう。それを写真に撮ってくれば良い。
何かすごく楽しくなってきた。ワクワク感がありゾクゾクしてきた。

パソコンで地図を出し何度も家康の辿ったであろう道を探した。図書館で道路地図を借りてきた。会社の訳知り顔の連中にバス路線やパソコンの使い方を教わった。パソコンの「駅探」で時刻表と首引きだった。

レンタカーの手配では地方に行くと営業所が限られる。ちょっと遠回りもやむを得まい。家康が泊まったといわれる小川城は滋賀県信楽の田舎だ。宿泊施設など有るまい。どれだけ時間が掛かるかわからない。う～ん、１日伸ばして日程は４泊５日にしよう。余裕ができるだろう。

さらに調べてみると宿泊予定の山城・草内は現在の京田辺市だがホテルが無い。手配を頼んだ秘書の鈴木さんがそう言って来た。３０分ほどの距離で宇治にホテルがあると調べてくれた。他のホテルもいつもの通り彼女に手配を頼んだ。まあ、私だけじゃ何にもできないからな、秘書さん様々だ。かくてすこぶる大変だった準備、調査がようやく終わった。

７月２５日(土)我が家を８：５０に出発。妻に玄関で「行ってきま～す」の写真を撮ってもらった。

行ってきま～す

９：４２新横浜をのぞみ３１３号は出発した。新大阪１１：５６着、地下鉄御堂筋線でなんばに行く。難波からＪＲ・空港急行で堺に行く。１２：４８予定通り到着。

ホテルの位置を確認して食事場所を探す。あまりない。川向こうにあった小さなインド料理屋に入る。ほうれん草カレーと野菜カレーにナンを頼む。これで腹ごしらえ完了。

ホテルは「アパホテル堺駅前店」朝食付きシングルで１３８００円、結構割高だ。チェックインはまだというのでザックを預け、娘にもらったいつものお気に入りオレンジ肩掛けポシェットに小物と飲み水を入れ替えて堺見物に出発する。

炎天下１５分ほど歩くと路面電車の駅に着いた。電車は行ったばかり。ふと見ると近隣の案内地図があり与謝野晶子の生家跡と千利休屋敷跡があるという。一駅の距離だ。よし、歩きで行ってみよう。

与謝野晶子生家跡という碑がぽつんと座っているだけだった。まあ、こんなもんだろうと千利休に向かう。門をくぐって中に入るとなにやら法被を着た人が何人かいる。ははん、ボランタリーガイドだな。隣に「千晶の杜」という記念館がある。千利休の千と与謝野晶

子の晶を組み合わせて「千晶（せんしゅう）」といっている。堺出身の有名人がこの二人だそうな。今堺市が観光振興でこの二人を売り出そうとしているらしい。ボランタリーもその関係の人だった。説明はそこそこに聞いて、あとは私の今回のこだわりの旅プランを熱をこめて説明した。どっちがガイドなのだろうね。

近くの駅から路面電車に乗った。「妙国寺前」で降りる。５分ほど歩いて妙国寺に着く。いわばここが今回の出発点になる。家康は堺ではこの妙国寺を宿舎とした。天正１０年６月２日、家康の伊賀越えはここを発してのことだった。

目をつぶってみた。私の得意技である。その時代にタイムスリップできるのだ。
旅支度をした家康がいた。付き従う家臣は酒井忠次、石川数正、榊原康政、大久保忠佐、大久保忠隣、天野康景、井伊直政、どうやら本多忠勝は先遣隊として既に信長のいる京都本能寺に向かっているようだ。すごい面々だ。伊賀越えが失敗して明智の軍勢に捕まったら人的にも徳川家壊滅は必死といっていいほどの名が揃っている。これに信長からの長谷川秀一、信忠からは杉原家次が堺見物の案内役としてつけられていた。おお、歩き出したようだ。

そっと目を開けてみた。目の前にあるのはさっきの大伽藍ではなく、それぞれ朱を基調に門とその向こうには階段と本堂が見えた。妙国寺は二年前の「元親」のとき登場した阿波・勝瑞城館の主の三好義賢(実休)が土地とソテツの木を寄進したことに始まったそうだ。そのソテツが現在も生き続けて境内にあるというので見てこようと思ったがそちらには門が閉まっていて行けなかった。

堺駅西口（さかい）

妙国寺（みょうこくじ）

歩いて５分位の所に堺奉行所跡がある。碑と案内板が立っているだけだ。今は高校と中学校になっているが以前は堺市役所があり、そのまえが奉行所で、さらに家康のころは堺政所（さかいまんどころ）と呼ばれていたらしい。家康はここには来たのだろうか。

この後古墳群を歩いてみて回るつもりだった。日本最大の前方後円墳である仁徳天皇陵はじめ沢山の古墳がある。それでもこの暑さだ、もう嫌気が差していた。と、そのときタクシーが近づいてきた。空車の赤字が目に入った。私の右手がかってに上がっていた。

仁徳天皇陵にもボランタリーガイドがいた。堀を隔てた中には入れない。玉砂利を敷いた祈り台があった。ガイドの説明によると前方後円墳に覆いかぶさっている木々は近代になって植えたそうだ。以前は土のままだったという写真を見せてくれた。この方がイメージが湧く。何かエジプトで見たピラミッドを思い浮かべた。崩壊の危険があり保全のために木を植えて森にしたという。そしてびっくりした。この古墳群を世界遺産に登録するよう名乗り出ているという。世界遺産は毎年その国で１つしか推薦できない。日本では今年は４つの候補がありその決定日がなんと明日（7/２６）だという。「是非当選するといいですね」という言葉をガイドへのお礼代わりにそこを後にした。

２日後、宿のテレビで放送されていたが世界遺産への今年度推薦は福岡県の「神の宿る島」沖ノ島・宗像に決まった。ガイドさんや地元の方お気の毒、次回にかけてね。

履中陵(りちゅうりょう)古墳、反正陵（はんせいりょう）古墳も立ち寄った。そして思った。家康はこの古墳群を訪ねただろうか。日本最大のものを見なかったはずが無いだろう。案外それが後の日光東照宮のモデルだったんでは無いか。私のかってな推量でした。

この後旧堺灯台を見た。この灯台は三重県の旧安乗埼（あのりざき）灯台についで木造灯台としては日本で２番目に古く、建築当初の場所に現存するものとしては日本最古の木造洋式灯台というのが売り物だった。
ホテルに戻ったのは５時をすぎていた。

堺の古墳

堺の灯台

シャワーを浴び、少し休憩した。７時半頃、ホテルを出て食事に行く。駅向こうに行った。ほとんど店が無い。後で知ったがＪＲ堺駅近辺より南海の堺東駅近辺が繁華街のあるところのようだ。しばらく歩いたが全く見つからない。あきらめて途中に一軒だけあったウナギ屋を思う。ひょっとして地方の店は閉店が早いから閉まっちゃうんじゃないかな。足を速める。時計を見ると７：５５だ。その時、店からお兄さんが出てきた。暖簾を仕舞うそぶりだった。あわてて案内を請うと、彼も時計を見てしぶしぶ中に入れてくれた。「うな重」を頼んだがもう品切れですと言う。「うな丼」ならありますというのでビールとそれを頼む。待つ間もなく５分ほどで持ってきた。うな丼は湯気も立っていない。私は常日頃から言っているが、うな重は３０分くらいは待たせないと旨い物にならない。食べてみたが、それでもそこそこの味だった。

すぐに食べ終わった。まだ８時半くらいだ。ここでホテルに帰ったら暇をもてあそんで

しまう。昼間は見つけられなかった明日のバス停を探す方々近辺探訪といこう。酔い覚ましにぐるっと回って橋を渡る。堺は港町だ。家康の頃は海外への出入り口でもあった。運河のようなものか。橋向こうに行くと飲み屋街のようなところがあった。早くここを見つけていればよかったなと思った。それでも暖簾に「うに」の文字が目に付く。よし、入ろう。生うに、うにの磯辺揚げ、うにのてんぷら、うにメニューは全部頼んでビールのつまみとした。

まだ時間がある。そばには先ほど目にしたトントンマッサージ屋がある。とんとんと階段を上ってマッサージを頼む。畳敷きの布団の上で揉んでもらう。おばちゃんとよもやま話をしながら約１時間、５０００円でおつりが来た。へえ、安かったな。

明日のバス停は分らないままホテルに帰着、フロントで聞きなおしまた駅前に、ようやく見つけてやれ一安心。明日は出発できるぞと安心して眠りにつく。

２日目、９：０１、昨日見つけておいたバス停「堺駅西口」から大阪市営バスに乗る。
９：１３「地下鉄住之江公園」に到着、大きな交差点に架かっている歩道橋を越えて向こう側のバス停で乗り換え９：１５発。９：５０「出戸バスターミナル」に到着。
１０：０６発、「ＪＲ平野駅筋」には１０：２５到着。
そうれ、ここまでは路線バスを乗り継いで来れたぞ。
１０分程歩いてＪＲ平野駅に行く。１０：４５、ＪＲに乗って「八尾」には１０：５５到着。ＪＲ八尾駅と近鉄八尾駅はちょっと離れている。人恋しくなってきたので駅前の交番に寄りお巡りさんに近鉄八尾駅までの道を聞く。道を教えてくれたがすぐそこからバスが出てますよと言ってくれた。見るとバスにはすでに人が乗り始めている。歩きかバスか検討する暇もなく小走りでバスに飛び乗った。１１：０５に出たバスは１１：１３に近鉄八尾駅に着いた。これからはレンタカーでの旅だ。

平野駅前（ひらの）

八尾駅前（やお）

文献によると家康一行は堺を出て「平野」、「八尾」を経て「飯盛山下」で引き返してきた本多忠勝と出会っている。八尾から飯盛へはどの道を行ったのだろう。当時は道もそれほどはなかっただろうし、まだ本能寺の変のことは知らない。だからたぶん主要道を行っただろう。飯盛辺りには東高野街道というのが今も通っている。たぶんこれを使ったのだろうと事前調査で目をつけておいた。

私は久しぶりに遠出の運転をする。上手く道に乗れるか心配だった。会社の知ったり顔の連中は「ナビがあるから大丈夫ですよ」とこともなげに言う。もうちょっと真剣に考えてよと思ったが小心者に見られそうなのでともかくも頷いておいた。

レンタカーは近鉄八尾駅から伊賀上野までを借りている。路線バスで飯盛辺りまでは行けそうだったが、その先が上手くつながらないし、レンタカーの営業所が近くに無い。到着点は伊賀上野でなく柘植にしたかったがその辺には伊賀上野しか営業所が無い。それでやむなくこの区間にしたし日程も３泊４日でなく１日伸ばして４泊５日にした

１１：５０、営業所員に車の説明を聞きトヨタ・プリウスは恐る恐る動き出した。ナビは飯盛のちょっと先の四条畷神社にセットした。

東にまっすぐ行けば東高野街道に出るはずだ。それを左折すれば飯盛辺りにいけるはずだ。久しぶりの遠出ハンドルなので最初はゆっくり、後続車にはごめんなさい。

ナビが「まもなく左折です」と知らせてきた。道路の標識も大きな看板でそれを知らせる。おかしい、そんなはずがない。もう一つ先のはずだ。あまり考える時間は無い。ナビの声を押し切り先に進む。そして左折した。片道１車線の昔風の道だ。いかにも東高野街道の名にふさわしいではないか。先ほどナビが教えてくれた道は片道２車線の立派な道だ。今ではあれが主要道なのだろう。危ないところだった。ほれ見ろ、したり顔の連中のいうナビ通りにしていたらつまらない旅になるところだったと心の中で毒づいた。

縄手、瓢箪山（ひょうたんやま）と事前準備で目にした地名が道路標識にでてきた。道は間違えなし、運転にも少しは余裕が出てきた。すると、前方の商店街らしきところに赤いトンガリコーンが見える。直前まで進むと「歩行者天国に付き進入禁止」とある。左右にはすこぶる狭そうな道だ。しかも角にはお巡りさんが立っている。さっきのレンタカーでの担当者には、途中で事故や違反でもあったら警察に届けて処置は自分でしてくださいと脅かされている。ようやく左折できたけど、その先は狭い路地が続いている。冷や汗をかきながらも路地を通り抜けることができた。

１２：４５、道沿いにあった「ガスト」に入る。ここまできてガストかよ、という思いはあったが私の運転技術からすると駐車場をしっかり確保できるところがいいという気持ちが勝った。ようやく落ち着いた。ここで心底ゆったりした気分で和風明太子スパゲティを食した。

「飯盛」と言う地名は現代ではなさそうだ。家康一行が本多忠勝と出会った地点だ。私は事前調査で飯盛山を見つけていた。そのそばに「北条神社」があり、バス停「北条」がある。私の計画はバス停「北条」を撮り、飯盛山の写真と並べ置くことだった。

いま走っている東高野街道は旧道だ。道は広くないし電信柱も邪魔、バス停も拡幅されていない。つまり、駐車がしづらいのだ。レンタカーでのバス停撮影は忙しいぞと思う。

「北条」のちょっと先で路駐し駆け戻ってパチリ、また駆けてハンドルを握る。やれ、一安心。右折して北条神社に向かう。ここでも駐車場はなし、それでも車も人通りもまばらなので路駐でちょいとお参りした。東高野街道に戻り振り替えると山が見える。他に山はなし。これが飯盛山なんだ。見つけたぞ、グッと来るものを感じる。

北条（ほうじょう）

北条から見る飯盛山

少し走ると「四条畷神社」の看板が右折を示していた。昨年の「正成の太平記」で来た所だ。考えてみるとあの時、事前調査で正成ゆかりの地を調べた。楠公寺というお寺が飯盛山の麓にあった。飯盛城跡もそばにある。時間があれば寄ろうと考えたがとても余裕がないので四条畷神社のみで断念した。今回の「伊賀越え」では「飯盛」の名は早くから出てきたが、それとの関連に最初は気がつかなかった。大分後になってから、ああ、あの飯盛山かと感激した覚えがある。

そういえば、今回の旅は昨年の旅と結構関連のあるところがある。これから行く山城大橋の木津川はすぐ上流が太平記で後醍醐天皇が籠もった笠置山だ。昨年汗びっしょりで登り柳生まで歩いたところだ。

四条畷神社で駐車場が見つからなかった。唯一見つけたものには無断駐車罰金の立看板がある。そういえば進入禁止と書いてあるあの坂を、昨年はタクシーならＯＫだと登っていったんだなと思い出した。今回ここはメインじゃないぞと鳥居だけを撮影して再び東高野街道に戻った。

「神出来」の標識を探す。先ほど「東中野」の標識を越えたからここを右折してゆかねばならない。ここを見逃してはいけないぞと心していたが自然に通り抜けられ、「倉治」も通過、つぎのポスト「津田」も「津田西町」をパチリとやった。

津田西町（つだ）

尊延寺（そんえんじ）

次のポストはいよいよ「尊延寺」だ。
家康は「飯盛」のあと「津田」「尊延寺」を通り「草内」に向かった。そして木津川を渡り「郷の口」に行き休息している。
津田も尊延寺もあっさり書かれている。しかし、私の今回のこだわりの旅では、２日目のメインはこの尊延寺だ。

それには訳がある。事前調査で、まだ路線バスをつないで伊賀越えルートを追おうとしていた頃だ。飯盛までは路線バスで行けそうだった。そこから津田、尊延寺を通って京田辺(草内）までを路線バスで追えなかった。図書館に行って調べたが分らなかった。館の案内サービスの女性に相談した。中年の方だった。いろいろ調べてくれたが結局は見出せず、今後もお互いに調べてみましょうで終わった。私は終わったと思っていた。すると一月後位に自宅に電話があった。尊延寺までのルートはわかりましたが、そちらはどうなっていますかと言う。びっくりした。今後も調べてみましょうというのはお飾りでもうお仕舞いという意味にとっていた。図書館には沢山の人が来ている。一人の人にそんなに沢山の時間をとれないだろう、それなのにわざわざ調べてくれたのかと思うと嬉しくなった。すぐに伺いしますと図書館に行った。寝屋川から尊延寺に行くルートがあると調べてくれていた。そのルートは家康のルートではないし、その先、宇治田原（郷ノ口）から小川城に行くルートも無いし、さらにその先も無理。結局はレンタカーでしか道は無いという結論を私は持っていた。だが、彼女の好意と仕事熱心さはとても嬉しかった。丁寧にお礼を言ってルンルン気分で家に帰った。尊延寺には必ずいくぞと決めていた。

「杉１」からは新道でなく旧道の方に右へ道をとった。「尊延寺」のバス停が見えた。まずパチリとやった。案内図があり尊延寺はすぐそばだ。車を近くの霊園案内所の駐車場に停めて探した。しかし、なかなか見つからない。無断駐車で聞きづらかったが案内所のお姉さんに聞いた。歩いて数分の所にあった。幼稚園を併設しているようだ。尊延寺は奈良時代（７３１年）に創建され、当初荘厳なものだったが鎌倉時代の承久の乱で焼失、その後、隆盛、衰退し現在は不動堂その他が残っていると網塀に案内板があった。私の目にはこじんまりとしたお寺に映ったがそれでも尊延寺に来たという満足感が残った。

尊延寺

尊延寺本堂

１４：４５、尊延寺からは「氷室」を通り、再び新道と合流して大阪府から京都府に入ることになった。もうここは山城の国だ。田園風景もあり何か国境を越えた感じがしないでもない。

計画通りに「草内口」のバス停を見つけてパチリ。草内、これをなんと読むか紆余曲折があった。（くさし）、（くさち）とつづいたが現地のバス停では（くさうちぐち）とアルファベットで書いてあった。まあ、現地で言っているのだから（くさうち）でいいか。草内は今の地名では京田辺市だ。駅のそばのコンビニで飲み水を買って宿に向かう。京田辺にはホテルがなかったので隣の宇治市に向かう。宇治には世界遺産の平等院がある。

草内口（くさうち）

平等院・鳳凰堂

「宇治第１ホテル」にチェックインする。１泊朝食付き７８８０円だ。小休止もそこそこに平等院に向かう。もう閉園してしまうかもしれない。フロントで聞くと歩いて１０分くらいの距離だという。ホテルを出て宇治橋の手前を右に曲がる。１６：４５、滑り込みセーフで平等院に入園出来た。鳳凰堂や庭園は１７：３０まで見られるが、博物館である鳳翔館は１７時までだった。

平等院は永承７年（１０５２）、関白藤原頼通によって父道長の別荘を寺院に改め創建された。翌年、阿弥陀如来を安置する阿弥陀堂が建立され現在鳳凰堂と呼ばれる。経典に描かれる浄土の宮殿をイメージした優美で軽快な建物とパンフレットに書かれていた。庭園も浄土式の借景庭園として史跡名勝に指定されている。私は小学校４年の時に母の里帰りで一緒に来た。中学の修学旅行でも来ているので３度目となる。特に印象に残ることもなく４０分くらいであとにした。

宇治橋に戻る。ここには思い出がある。小学校４年の時だ。母の生家は滋賀県多賀町にあった。彦根の隣にある。多賀大社のすぐ前だった。夏休みに２～３週間ほど滞在した。その間に京都の伏見にある山口さんのお宅に２～３日だろうか泊まった。おばさんのお千代さんは母の従姉妹で姉妹のような関係だったらしい。その伏見から来て一日宇治で遊んだ。この時、宇治川で水遊びをし、宇治橋の橋げたの間を泳いだ。今、下に見る宇治川の流れは数日来の降雨のためか濁流となって音を立てて流れている。とても泳ぎなどできそ

うも無いが、目をつぶるとあの時一緒に泳いだ子が朦朧と現れた。治夫ちゃんだったのか、京都だったから達ちゃんだったのか。堤で見ていてくれたのは母だったのかお千代おばさんだったのか。もう、この二人はいない。なにかおセンチでそれでいて懐かしい思いがこみ上げてきた。そういえば、秘書の鈴木さんが宇治に宿舎を取ってくれた時、すぐ思い浮かべたのは宇治橋の橋げただった。鈴木さんの言うことを聞いて、草内で宿を取れずにわき道して宇治に来て良かったと思った。

夜の食事は周りを探したが早々に閉めている店々だったのでホテルの食堂兼一般へのレストランにした。アラカルトで魚や一品料理を頼んだ。余計だったのは最後に頼んだウナギの蒲焼だった。お腹も一杯だったし、味もねえ。

３日目、今日もレンタカーで回る。昨日木津川の山城大橋を渡り、左折して宇治に向かった。今日はその道を戻り、山城大橋の袂「山城大橋東詰」に来た。ここに「セブンイレブン」があることは昨日確かめていた。駐車場があるのだ。車を降りて橋の真ん中まで歩いた。ここで木津川をどうしても撮りたかったのだ。

山城大橋東詰

木津川（きづがわ）

「伊賀越え」では、この木津川渡りが徳川家康と穴山梅雪とでは命の分かれ目となった。家康の頃は橋がなかった。彼らは船を用立てて渡らねばならなかった。
この時、家康はあの千両の路銀がものをいった。無事に木津川を渡ることができた。
しかし、穴山梅雪は違った。この地で命を落とす。彼は家康とは遅れてこの地「草内」に来た。なぜ家康とは別に来たのだろうか。信長の死のドサクサに家康に殺されると思ったのだろうか。あるいは、家康は伊賀越えで岡崎に向かうと決めたが、梅雪は自ら案内人を雇い、宇治橋から木幡越えにより近江に入り、美濃から岩村より信州を経て甲州に入ろうとしたので家康と別れたのか。いずれにしろ梅雪はこの地で命を落とした。梅雪の下人が所の者と悶着を起こし怒った郷人達に殺されてしまう。この時、梅雪と共に命を落としたものとして１１人の名があげられている。梅雪の従者は４０余人というから家康と一緒にいたほうが一揆などには対応できたのではないか。家康の方も自分のことで手一杯で梅雪まで面倒を見れなかったのか。

亡くなった人たちに手を合わせここを後にする。

事前調査ではここをすぎると「石原」になる。家康一行はこの「石原村」で、石原源太を頭とした一揆数百人に襲われる。本多忠勝や高力清長、吉川善兵衛父子などが奮戦してこれを退け、そして「郷ノ口」に行き宇治田原の山口光広宅で休息したとある。

その「石原」をパチリとやろうと思っていたが、見つけられないままその辺はあっというまに通り過ぎてしまった。「まあいいか、ここは本命じゃないからな」と自分をごまかして戻りはしなかった。

「郷ノ口」のバス停はすぐに分った。宇治田原の町役場もすぐに見つけて予定通りパチリとやった。もうここはこの程度でいいやと思った瞬間、見逃せない看板が目に入った。
「史跡・山口城址（家康伊賀越えの道)」と矢印も書いてあった。
「えっ、これがあの山口光広館なのか、こんなところなんだ、う～ん」
歩いて登って行きたいのだがためらった。
いつもの徒歩なら行くところだが、今日はレンタカーだ。駐車場もないし、これから本命の小川城に向かう。時間がどうなるのかよくわからない。暗くなってレンタカーを返すのは避けたい。看板の写真だけでガマンしよう。後ろ髪を引かれつつパチリで発車した。

郷之口（ごうのくち）

山口城址への看板

「奥山田」を通り「朝宮」には旧道というか生活道に入る。無事バス停を見つけてパチリ。

奥山田（やまだ）

朝宮（あさみや）

また近江グリーンロード３０７号線に戻る。そして「中野」を見つけて右折する。

いよいよ小川村に入る。さあ、小川城だ。３日目のメインだ。
バス停「小川口」は簡単に見つかった。パチリとやる。ここから南に１５０メートルほど戻り城址登山口の案内板を左折して４００M、さらに８００M登った城山頂上に小川城跡（県史跡）があると「歴史散策」の本には書いてあった。しかしパソコンの道路地図では

いくら探しても見つからなかった城跡だ。

車で少し戻った。あった、あった。「城址の登山口」の看板だ。そばに農協の建物と駐車場があった。失敬してごめん、停めさせてもらう。

小川口（おがわ）

小川城登山道

肩掛けポシェットに水ペットを入れて出発。緩やかな坂道を登る。なるほど４００Ｍほどのところに小川城入口の案内板があった。細い山道になってきた。それでも小さな車が通れるような道でもある。汗してハアハアいいながら登る。８００Ｍくらいで頂上に着く。

結構下に村が見える。それなりに登ってきたのだなと実感する。頂上の下に古びた東屋風の小屋があり軒に「小川城跡の歌」があり夕焼け小焼けのメロディーで歌って下さいとある。辺りを見回す。誰もいない。声を上げて歌った。

頂上は小さな平地で回りに木立があり見晴らしは良くない。建物跡も土台が高くなっていて草が生え茂っているだけだった。それでも下手に建物などを建てて無いところがいい。想像力が湧くではないか。本丸跡のくぼ地に中くらいの石が見える。本丸跡の力石だ。番兵が退屈紛らしに力比べで持ち上げたそうだ。うそつけと思いながらもパチリ。この写真はどこかで見た気がする。歴史散策の本はこの角度でとった物だなと合点がいった。この城址の発見は昭和４９年で、その後は老人クラブが管理しているらしい。だから車でも入れるようにしているのかな。

本丸跡の力石

山頂より見る

そっと目をつぶってみた。家康一行が飯をがつがつ食っている。郷の口の山口城で休憩した一行は夜の道を歩きこの小川城で１泊した。山口光広の実父多羅尾光俊が小川城の主だ。光俊が赤飯を出すと、家康主従は飢えと疲れから箸も持たず手ずからつかみ食ったという。危険と不安の中の強行軍だったのだろう。ただ家康たちが食し寝泊りしたのはこの

山上では無いのだろうと思った。ここはいざ戦いの時に籠もったところで多羅尾光俊も日ごろは麓にある館で暮らしていたのではないか。家康もその多羅尾館で休んだのではないかなどと想像力を楽しんで下山した。

農協まで戻り、さらに６００Ｍほど歩いて大光寺にいった。特に意味は無いが「歴史散策」に小川城の隣に載っていたからだ。戻り道に目を上げると人家の向こうに小川城の城山が見えた。あそこに登ったんだなと満足感が湧いてきた。

プリウスを走らせ「江田」で右折して信楽上野線を分かれ４２２号線に乗る。
「神山」でパチリ、（かみやま）でなく（こうやま）と読むことを知る。
どこかで昼食をと思ったが簡単にはお店が無いような地域だ。お腹の虫がグーと催促してくる。「丸柱」でパチリ、その交差点にあった寿司屋の看板が目に入った。残念、お休みでした。

神山（こうやま）

丸柱（まるばしら）

次は「石川」だと運転しながら探す。それらしき標識が見つからないままどんどん進んでゆく。「馬場」の標識で通り過ぎたことを知る。すると「そば」の看板が見えた。もう、考えるのは後回し、めしだ～。
１３：３０、手打ちそば定食を頼む。ソバに炊き込みご飯、天ぷら、玉子焼きで９８０円。
お腹が満ちてくると思考回路が動いてくる。「石川」は通り過ぎてしまった。どうしよう、戻るか前へ進むか。やっぱり、戻ろう。
バス停「石川集落センター」を見つける。単独の名前でなくても「石川」が入っていればいいやとパチリ。やれやれ。
「河合」のバス停も脇の生活道に入って一巡りして見つける。１４：２０、案外早くに今日のノルマを達成する。

石川集落センター（いしかわ）

河合（かわい）

後は本道を南に下がって２５号線にぶつかったら右折すればよい。緊張感が全く緩んだ。しばらく進むとナビが変な方に指示する。右折でなく左折を言う。そんなはずは無い、従わない。また指示、おかしい、従わない。どうやら、高速道路に乗れと指示しているようだ。私は高速道路を全くのノーマークで頭の地図にインプットされていない。しばらくすると方向感覚は全くなくなり、どこを走っているか分からなくなった。それでもナビの方角はあっているのだろう、ただ高速は使わないだけだとナビの方向に走った。何がなんだか分からないまま目的地には近づいているのだろうと走った。やがて「目的地近辺です案内を終わります」といってきた。あたりを見回す。それらしきものは無い。どうなっているんだ、そしてここはどこだ。

私の頭には目的地のおおよその地図はインプットされている。ここはそこではない。考えた。ナビを電話番号で入れた。あの時ここでいいですかというような画面が出てきた。メガネを取り出すのも面倒だし、番号は店で聞いたものだからそのままセットした。ひょっとしてと今度は住所でナビを入れてみた。３キロ先が目的地と出る。後で聞いたが２年前まではここに営業所があったという。ナビが古かったのだ。だから盛んに高速に入れといったんだ。

レンタカーを返し、宿まで送ってもらった。不思議だったのはガソリン代を請求されなかったことだ。ガソリンを満タンにして返すか、使った分を現金で払うかだ。ナビと喧嘩していたのでガソリンスタンドを探すどころではなかった。営業員はガソリン代は結構ですといった。そういえば、時々ヒューエルランプを見たが目盛りが下がっていなかった。いくらハイブリッドだとはいえ２日間走ったのだ、ガソリンが減ってないはずが無いだろう。そうは思ったが、相手が要らないというんだからこちらからは無理に払うこともないだろう。得した感じはあったが狐に包まれたとはこういうことをいうんだろうな。

今夜の宿は「ルートイングランディア伊賀上野・和蔵の宿」、１泊朝食付きで８０３０円。
私は伊賀上野には一度来ている。ちょうど、高校卓球部の後輩洋介が亡くなった時だ。
福井、津を目的地として福井近辺で北の庄城、福井城、朝倉の一乗谷を訪れ、ついで、伊賀上野から津に至り津城に行ったときだ。

あの時は洋介のお葬式の直後に出発、台風のため新幹線が名古屋止まり、在来線で福井まで行ったものだ。

なぜ、福井と津を目的地としたか。
当時、私は徳島県を最後にすべての県に行ったことになった。
全国制覇という言葉が頭に浮かんだ。しかし、すぐに引っ込めさせた。
１度行っただけで制覇とはおこがましい。都道府県に失礼だ。
そこで自分なりに「制覇」の定義を作った。

各都道府県のメジャーな観光地２つと県庁所在地を訪れたら「制覇」としよう。
観光地は問題なく行っている。ならば、後は県庁所在地だ。
そこで、県庁所在地でまだ行っていない所を数えた。福井、津、山口、佐賀の４市だった。
手始めに福井、津に行こうとしたのだ。
次いで佐賀に行き、名護屋城では全国の戦国武将が集まっていることを知り大変な感激を覚えた。そしてその年の内に、徳山での全国実業団卓球選手権の帰りに山口に寄り、ここに全国制覇がなったものだ。平成１９年、今から８年前のことになる。

伊賀上野城はすでに来ている。その時、忍者屋敷も見ている。写真も写している。家康もこの伊賀上野は通っていない。

伊賀は織田信長が伊賀征伐で伊賀者を絶滅させようと虐殺を徹底した地だ。伊賀者の恨みを買っている。その同盟者である家康への思いもよくないに決まっている。だから、家康はこの地を伊賀越えの時は避けた。丸柱、石川、河合ときて次は柘植に抜けているのだ。私が今回伊賀上野を選んだのは単にレンタカー営業所がそこにしかなかったからだ。

それでもお城のプロの私が素通りしてはいけないだろうと思った。宿に荷物を下ろし軽装となって伊賀上野城に行き、忍者屋敷にも寄らず、さっと順路を一通り辿り宿に帰った。

夕食は宿で済ました。ガイドに書いてあった名物の豆腐田楽料理屋はあいにくと定休日だったのだ。

伊賀上野城

４日目、これからの交通手段は列車、電車である。従って伊賀越えオリエンテーリングのポストはプラットフォームにある駅名看板だ。

宿から徒歩３分、「西大手」８：４５、「伊賀上野」８：５５「柘植」９：１０着。

今日のメインは柘植の「徳永寺」である。ここは信楽から来て伊賀上野を避けた家康が伊賀で休息をとった寺である。

ずいぶんと調べた。パソコンの地図を何度も調べ、拡大と縮小を繰り返しようやく場所を特定、プリントアウトした。それでもおおよその見当しかつかなかったところだ。だが、案ずるより生むが易し、駅員さんが丁寧に教えてくれた。それだけでなく、コインロッカーがなくてすみませんと謝られてしまった。

駅前の道は右にとった。事前調査の地図を参照していたらたぶん左に行っていたところだった。都美恵神社の中を通りちょいとお参りして、駅員に教わった通りに肉屋さんの角

を右に回るとまもなく徳永寺が右に見えた。駅から２５分は歩いただろうか。畑や田んぼの中にポツンと建っていた。山門をくぐり中に入ると庫裏が見える。

柘植（つげ）

徳永寺（とくえいじ）

目をつぶると疲れた表情の家康が庫裏で何かをほおばり白湯を飲んでいるようだ。和泉の堺から河内を通り山城、近江の信楽から伊賀に入った。おそらく明智の討手は振り切ったと思っているだろうが、土地の一揆、伊賀者の急襲は十分に考えられる。伊賀での家康感情は良くはないのだ。まだまだ気は抜けないのだ。寺の周りには山城や信楽から道案内などしてきた甲賀者１００人、その他５０人ほどが見張りをしていた。家康はここでの休息もほどほどにして伊勢への道を急いだであろう。

徳永寺を出て少し歩くと大和街道の柘植宿の旧宿場町に出る。現在の新道からは外れているので今は寂れた感じだ。ここに「家康ゆかりの寺・徳永寺」という案内看板がひっそりと立っていた。

その先を少し歩いてゆくと歴史民族資料館があった。隣の高台に文豪横光利一碑があった。館を入ってすぐ右の壁に大きな図が張ってあった。私は目を見開いた。家康・伊賀越え経路図（川崎文隆）と大きく書いてある。私が参考にした図である。１頁目に載せたものと同じものだった。これで私は鼻を大いに開いて得意顔だった。受付の男の人にその旨を言うと喜んでいた。そして１週間前に女子高校生が来て夏休みの宿題の自由研究の題材に家康の伊賀越えを選んだ。何か参考本はないかと聞いてきたんですよと言う。私がいたら教えてやりましたよとは心で思っても口には出さなかった。

１０：５０資料館を出て１１：２０に柘植駅に着いた。
１１：４２「柘植」から「加太」に１１：５３到着。

「加太」は（かぶと）と読む。
事前準備の時、私は大発見に自分で興奮した。

家康は柘植から伊勢に向かう時、山道の鹿伏兎（かぶと）越えをした。

この鹿伏兎の地名を実際の地図で探した。でも出てこない。他の文献を見ると加太越えルートとも出てきていた。私はこれを（かだごえ）と読んだ。加太の地名だと現代の地図にも出てきていた。たぶんこれなのだろうなと半信半疑で見当をつけていた。
ところがある時、加太は（かだ）でなく（かぶと）と読むのではないかとひょいと思い当たった。これだ。読み方は同じ、現代では加太という漢字を当てているのだ。私は確信して大発見でもしたかのように喜んだ。現代の地図をよくよく見ると（かぶと）とフリガナが振ってあった。

家康は鹿伏兎越えで、土地の伊賀者、音羽の忍者達に襲われている。ここではあの山口光広たちの奮闘でこれを撃退した。その時の感状が今でも残っている。家康は逃げる途中の豪族や護衛の者、甲賀の忍者達にも豊富な資金をばら撒いて味方にしていったのだろう。信長からもらったあの千両の金がものをいったのだ。

音羽の忍者といえば、若い頃読んだ白戸三平の忍者漫画に良く出てきていた。
「忍者武芸帳」や「ワタリ」である。ずいぶん興奮したものだ。
その音羽の忍者が実際に歴史に出てきている。漫画作者といえども時代考証は良くやっているのだなと実感する。

駅のすぐ裏山が鹿伏兎城の城山だ。
駅にすぐ近い踏切を渡ると神福寺がある。ここが鹿伏兎城の上り口になる。
寺の門の前に案内板と鹿伏兎城址（山頂）碑がある。そこでパチリとやったが、私が訪れた城の数には入れられない。大手門かはっきりした入口を入って自分の足をつけないと数には入れないことになっているのだ。案内板には上り口が点線で書いてあるが実際には見つからない。ガイドブックにも登山道は未整備で分りにくいから気を付けた方が良いと書いてあった。君子危うきに近寄らず、駅前まで戻ることにした。

加太（かぶと）

鹿伏兎城址碑

駅には自警団の人だろうか緑色のユニフォームに黄色の腕章をつけた人が二人いた。
何をしてるのですかと聞いてきたので、待ってましたとばかりに家康の追っかけプランを得意げに話した。そういうやり方もいいですねと感心してくれたので、私の鼻がまた得意げにムズムズと動いた。

駅の前には街道が走っている。右手が伊賀で左手が伊勢だな。家康が襲われたのはどちら側だろう。どちらにしてもこの近辺だったのだろう。三十六計逃げるにしかず、家康はスタコラサッサと関の方向に逃げていったのだろう。

この時間、列車は１時間に１本しかない。１２：５３発、「関」には１２：５９に着いた。「関」の名のいわれは「鈴鹿の関」だ。「白河の関」、「安宅の関」を加えて日本３大の関だ。関には古い宿場町の町並みを保存してある。ちょいと見て回ろう。

その前に腹ごしらえをしよう。人はまばらでお店も活気が無い。宿場町の入口で空いていそうな店に入る。看板には「わらじカツ」が名物かのように書いてある。肉嫌いの私が頼むわけが無い。とろろ飯でごまかそう。
街道沿いに町並みがある。整備された様子が見える。３年前、信長の時に行った越前の熊川宿に似ている。それよりは賑やかそうだ。予算の規模もこっちが上かな。町の中心にある地蔵院まで歩いてみた。折り返してわき道を戻ってきた。東の追分まで歩こうと思ったが、暑い、疲れた、やめよう、ここらで切り上げようという誘惑に勝てなかった。

家康は鹿伏兎からこの関に来て、休憩もそこそこに亀山に向かったことだろう。

関発１４：５９、亀山には１５：０５到着する。

関（せき）

亀山（かめやま）

宿舎の「亀山第一ホテル」は駅から歩道橋を越えて５分位の所にあった。
隣のスーパーで飲み物の買い物をしている時に私のケータイが鳴った。
誰だろう、私のケータイは発信専用で普段はオフにしている。だからそれを知っている人たちは掛けてこないのだ。なんと、高校卓球部の後輩、堀口女史だった。珍しいこともある。電力の発送分離による安価なルートがある、東信電気で採用しないかという誘いであった。後ほど対応しますといってケータイを切った。

ホテルは年月が結構経ているようであった。１泊朝食付きで４９００円、今回の旅で一番安い値段だ。

一休みしてから城下町見物に出かけた。亀山城は私は初めてなのだ。
ホテルから上り坂を登って行く。横断歩道のところで女子高生の一団が前にいた。お城への道を聞くと警戒心ありありの表情で教えてくれ、逃げるように仲間の輪の中に入っていった。私の自尊心が傷ついた。私の顔つき、物腰は人に安心感を与えると自信を持っていたのに。

亀山城跡には三重県内で唯一残る江戸時代の城郭建築物である多聞櫓（県史跡）がある。あいにく修理用の足場と網が景観を邪魔していたが、輪郭は分るものだった。
亀山城は櫓や城壁がチョウが舞うように見えることから粉蝶城（胡蝶城）ともよばれた華麗な城郭だったそうだが、そこまでは私の目には映っていない。

亀山城多聞櫓

先の方に歴史博物館があると案内図があった。ぶらぶらと歩いていったが良く分らない。駐車場のようなところに人がいたので尋ねてみた。なんと、先ほど「加太」の駅で会った自警団風の人だった。向こうもこちらを認めて、お互いに笑顔をかわした。博物館は５時に閉館になるというので大急ぎに足を速める。５分前に到着、ふ～と息を吐いて入口を見ると「本日休館日」の板が見える。う～ん・・・。

「亀山に過ぎたるものの二つあり、伊勢屋蘇鉄に京口御門」と謡われた堂々たる門があったという。その京口御門跡に行った。説明版が有り昔のらしき白黒写真があり往時が偲ばれる。周りを見回し上下の地形を見比べると何かイメージが湧いてきて、気持ちの良い雰囲気に浸れた。

宿に帰ると、６時過ぎ、シャワーを浴びて一休み。ベッドでゴロンタをして食事の場所を考える。フロントでもらった亀山観光案内のチラシを見る。食事どころのスペースが少ない。どうやら繁華街などない町のようだ。食堂街などのなく、ちらりほらりのようだ。さっき宿の傍で見かけたチェーン店「サガミ」を思い出す。たしか中央高速の府中インターの傍にもあった。あれでいいかと決めた。

花かご和膳と生ビールを頼む。おつまみに冷奴、ナスの浅漬けを追加。デザートは白玉ぜんざい。話し相手はなく一人おとなしく味わって、この旅最終の夜は更けていった。

５日目、最終日である。
「亀山」発９：２３、「津」には９：４２着。９：４５の電車に乗り遅れる。名古屋方面なのか伊勢方面か、ホームはどっちだと迷っているうちに電車は出てしまった。それでもここの近鉄は何本も出ている。９：５９に乗れて「白子（しろこ)」駅には１０：１５無事着いた。

白子駅前の観光案内板で地図と名所案内を見ていると見逃せないものが目に付いた。
「⑫徳川家康公九死に一生を得て、駿府に戻る船出の港（浦)」とある。
「これだ」、思わず胸の中で叫んだ。
江島公園の中にあるらしい。

事前準備では家康は白子から三河に船で渡ったとある。
しかし、白子のどの浜かはっきりしない。白子浜とか若松浦とか諸説があるようだ。
私は白子の辺りの浜辺をパチリとやっておけばいいだろうと思って来た。
それがここにははっきりと書いてある。ただ、駿府に帰ったという点が不満だった。
帰ったところは岡崎から浜松へだろう。
駅前に観光案内所があった。そこに寄り、「歩いてみよう白子周辺」というチラシをもらった。江島公園の船出の浦のことをいうと、はっきりしないんですよとはなはだ頼りない。
駅の案内板に書いてあることも知らないみたいだ。

駅前の客待ちタクシーに乗る。
「運転手さんまず白子港に行って。それから家康が船出した江島公園の若松浦に行ってね」
家康の話を運ちゃんにしてみるが、彼はどうも歴史には強くないようだ。
方向がどうもおかしい。港とは逆方向のようだ。
「お客さん着きました、白子高ですよ」
「なに、これ、学校じゃないの」
「えっ、白子高校じゃないんですか。あっ、港ですか。そうだ船出の話をしてたんですよね。すみません。」
「いやいや、わたしも悪かったね。港とはっきりいえばよかった」
（高）と（港）の違いでした。

白子港で小型灯台を浜と一緒に写してパチリ。
次に江島公園を目指す。運ちゃんは自信がなさそうに無線で確かめている。
海辺のなんていうこともない公園だった。
あちこち歩くと、ようやく公園の片隅にひっそりと九死に一生の看板があった。
ただそれだけだった。道を渡ると海が見えた。この辺かなとパチリ。

はなはだ頼りないが、鈴鹿市としての看板に書いてあるのだから、まあ、ここか。

白子（しろこ）

白子　若松浦

家康は関から亀山、そして白子若松浦に至る。土民一揆の輩は追々迫ってきたが、ここで廻船業者の角屋七郎次郎秀持が柴を積み、沖を通りかかった。声を掛けた相手が家康の一行と知り、大いに驚き、そのまま船に乗せた。夜のことだった。こうして家康は船で海上を大浜に向かい、翌早朝に着岸している。

タクシーで隣の「伊勢若松」駅に行く。途中に「大黒屋光太夫記念館」に寄る。
大黒屋光太夫は白子の船頭で、江戸時代暴風雨で漂流しアリューシャン列島に漂着する。
後にロシアのエカテリーナ２世に拝謁、日本に帰国して江戸幕府に仕えた。
まあ、地元では有名人なのだろう。
見終わりタクシーに乗ると運ちゃんが言った。
「お客さん、メーターはここで止めときましたから。先ほど道を間違えましたので」
運ちゃんなりの誠意を見せてくれた。

１１：４２「伊勢若松」発、１２：２５「近鉄名古屋」着。
名古屋では八丁味噌の煮込みうどんが食べたかった。
以前、地元出身の日比野さんに案内されて食べたものだ。
名鉄百貨店の専門店山本屋総本店で玉子入り煮込みうどんを食べる。１１１２円だった。

腹もふくれたので、いよいよ「伊賀越え」のゴール地点岡崎城に向かおう。
１３：２０「近鉄名古屋」発、１３：５５「新安城」着、１４：０５発で「岡崎公園前」には１４：１２到着する。

岡崎城には以前一度来ている。卓球の日本リーグ強化合宿兼海外遠征候補者選考予選で柴田、林と来た時だ。彼らが試合で汗だくの時に、私は一人失敬してこの城を訪れた。
そんなことを思い出しながら２０分ほど歩くとお城に到着した。
裏手から天守を目指すと何人かが写真を写していた。天守閣が見える。
セミプロのような人に私は万歳をして撮ってもらった。
「ばんざ～い、ゴ～ルだ！」

白子から大浜に着き、家康は角屋秀持も伴い岡崎城に入る。御家人衆の喜びは言うまでもなく、国中挙げての歓喜であったという。
家康はこの日、光秀を討伐する決意を告げている。
蒲生賢秀、氏郷親子からの日野城堅守の報に接し、直ちに送った返書にそう書いてある。
１０日後、兵を興し岡崎を発し鳴海に至る。ここで秀吉の使者が来て、光秀を討ち京を平定したことを告げられる。
信長の仇討ちと天下の後継は諦め、兵を引いた家康は近畿のことは織田家中に任せ自分は甲斐信濃経略に専念することになる。
家康は、こうして人生最大の危機を乗り切った。

天守に向かう途中、武将姿の若武者に出会った。赤っぽい皮のような鎧姿だった。
通る人が一緒の記念撮影を頼んでいる。終わるとちょうど私のほうに来た。
「あなた、どなたなんですか」と尋ねてみた。
「井伊直政です」
「ああ、井伊直政役なんですね」
「いえ、井伊直政です」と譲らない。
後でパンフレットを見てみると「グレート家康公葵武将隊」といって土日祝日は演武を披露、平日は観光案内、記念撮影を行っているようだ。
「私は家康の追っかけで伊賀越えルートを４泊５日でようやくここ岡崎城でゴールしたんですよ」と自慢そうに言った。すると興味を持ったようで、
「井伊直政もその時家康のお供をしていたのですよ、その時はまだ小姓の身分でしたが」
さすがに勉強している。歩きながら井伊直政談義を楽しんだ。
そして彼をパチリとやった。

岡崎公園前（おかざき）

井伊直政　役

天守に登り、心地よい風を受けて一休み。
いつも思うのだが、天守にはいつも風が吹き抜けてくる。きつい階段を登った後だから余計に心地よく感じるものだ。
天守を降りて茶店でソフトクリームをペロリ。
あの卓球の時と同じことをやってみたかったのだ。

一息ついて時計を見ると、１５：４５だ。さて帰るとするか。
「岡崎公園前」１６：１３発、「名鉄名古屋」には１６：５５着。
家への土産は名古屋近辺では定番の「赤福」を買った。

「名古屋」発１７：３２、のぞみ３６号は「新横浜」１８：５５着。
ここでも定番の崎陽軒のシュウマイを買って、
今年のこだわりの旅の達成感に浸りながら、
「ただいま～」と帰宅した。　　（完）

ゴ～ルだ　！
バンザ～イ　！
岡崎城天守をバックに